

暴力と救済の間で ペルーの「学園もの」小説を通して

宮下 和大

序

本稿では 20 世紀ペルーを代表する三人の作家、セサル・バジェホ (César Vallejo, 1892-1938)、ホセ・マリア・アルゲダス (José María Arguedas, 1911-1969)、マリオ・バルガス=リョサ (Mario Vargas Llosa, 1936-) の小説作品、中でも学校を舞台とした「学園もの」小説を取り上げる。それぞれの作家が作品の中で描いた学校という舞台が、物語においてどのような役割を持つかを考察する。

総論的な学校論としては、山本哲士が「学校化 (schooling)」という言葉を用いて、学校の構造を三つの側面に分けて説明している。一つ目は「学校化された学校」、すなわち学校は「学校」という一つの閉じた空間であり、学校に行く前の子供の世界や、学校を出た後の世界とは区切られているということである。二つ目は「学校化する学校」で、これは学校が外部の社会に対して、学校の論理に基づいて動くよう働きかけ、同時に内部の生徒たちに対しても学校の論理を身に着けさせるということである。三つ目は「支配の学校、学校の支配」、すなわち学校が特定のイデオロギーや価値観を生徒たちに伝える機関であり、政治的な権力装置となっているということである。¹

学校は外の社会から独立した空間でありながら、そのイデオロギーを取り入れ、教育という形で再生産する機能を持っている。一方で社会もまた学校が持つ論理を取り込んでいる。この相互作用から、学校と社会の間にはマイクロコスモス/マクロコスモスの関係が形成されているといえる。

また、学校と社会が同型の論理に支配され、その論理を生徒に身に着けさせるのが学校であるならば、学校は子供が社会に出てゆくためには避けることのできない機関として存在することになる。学校へ行くということは社会参加のための通過儀礼となるのである。こうした学校の特徴や機能は、三人の作家が描く学校にも概ね当てはまる。

バジェホはモデルニスモの影響を強く受けた『黒き使者 (Los heraldos negros)』や前衛主義的な『トゥリルセ (Trilce)』といった作品を残した詩人であると同時に、小説家としても知られている。少年パコ・ユンケが初めて学校に行く日を描いた短編『パコ・ユンケ (Paco Yunke)』は 1931 年に書かれ、バジェホの死後 1951 年に出版された。1931 年はイ

ンディヘニスマ（先住民擁護主義）の色彩が強い長編『タングステン（*El tungsteno*）』の出版と同年であり、『パコ・ユンケ』も同様の傾向を持っている。²

アルゲダスもインディヘニスマ作家の一人に数えられるが、幼少期から先住民の世界に親しんだ彼は、ペルーのシロ・アレグリアやエクアドルのホルヘ・イカサなどといった作家の旧来型のインディヘニスマ作品にあった先住民世界を外部から客観的に捉えるという視点を刷新したことから、ネオ・インディヘニスマの作家と呼ばれることもある。1959年に発表された長編小説『深い川（*Los ríos profundos*）』は、インディヘニスマ的テーマに加えて、事物や登場人物の精緻な描写、少年期の反抗という普遍的なテーマ、魔術的色彩を帯びた象徴主義などを巧みに組み込むことによって普遍的価値を得ている³。この作品では、主人公が父親との放浪の旅の末に入った寄宿学校での生活が中心的な舞台となっている。⁴

バルガス＝リョサのデビュー作となった1959年の短編集『ボスたち（*Los jefes*）』に収められた同名の短編は学校の生徒による学校当局への反抗を描いており、また1962年に発表された初の長編『都会と犬ども（*La ciudad y los perros*）』は士官学校を舞台とした作品である。彼はこの長編がスペインのブレーベ図書賞を受賞したことを契機に名声を得て、コロンビアのガルシア＝マルケスなどと共にラテンアメリカの「新しい小説」を代表する、いわば「（1960年代に起こったラテンアメリカ小説の）〈ブーム〉と共に生まれた」⁵書き手となった。この「新しい小説」とバジェホやアルゲダスが著したインディヘニスマ小説との間で生じる違いにも注目したい。

暴力の場としての学校

三人の作家が描く学校はいずれも暴力に満ちている。そして、それを取り巻く社会もまた暴力が横行している。学校と社会はその暴力性において共通しているのである。『パコ・ユンケ』を見てみよう。

主人公パコ・ユンケ⁶の母親は、グリエベ家にわずかな賃金で使用人として雇われている。主人ドリアンは鉄道会社の支配人であると同時に村長でもある。パコはグリエベ家の息子ウンベルトの相手をするために田舎から引っ張り出されて町の学校に入ることになったのだ。ウンベルトは自分勝手な乱暴者で、パコに叩く、課題を奪い取るといった暴力を振るうが、親同士の絶対的な権力差を前にパコは反抗せず、それどころか反抗するという発想すら持っていない。この暴力を助長するのが、教師の偽善的な態度である。左官屋の息子の遅刻には罰が与えられるが、ウンベルトが遅刻をしても一言注意するだけで済ませるってしまう。あるいは生徒同士の言い争いでウンベルトが不利になれば、話題を中

断する。このような行動がいくつも現れている。口先では全ての生徒を平等に扱おうと宣言しているにも関わらず、実態は権力者の子供を最優先することで保身を図っている。これはウンベルトが振るうような直接的な暴力とは異なる、間接的な暴力の形をとっている。ここでは直接的な暴力と間接的な暴力の二つが存在していて、それらは共犯関係にあるのだ。

学校の中でのパコとウンベルトの関係性が、学校の外における彼らの親の関係性（使用人／主人）をそのまま移し替えたものであることは明らかだろう。同様に教師が振るう間接的な暴力を学校の外側に移し替えると、作品の中で明示されているわけではないが、それは政治的暴力となるだろう。資産家の息子が使用人の息子に振るう暴力に見て見ぬふりをする教師の姿は、持てる者と持たざる者の一方的な権力関係を助長する政治の悪意と重なって映るのである。二つの暴力が支配する世界という意味において、学校は、社会のミクロコスモスとなっている。

『深い川』にも同様の構造が見られる。学校の内部においては腕力の強い生徒ジェーラスやその仲間が、気弱な生徒をいじめていて、学校の校長であり神父でもあるリナーレスはそれに対して見て見ぬふりをする。ジェーラスは校長のお気に入りの生徒なのだ。そして学校の外部では、塩を隠し農場主にのみ秘密裏に流す専売所に対する抗議の暴動が起きるのだが、政府の派遣した軍隊によって鎮圧される。この時も神父は政府の側につき、反抗する人間には苦しい言い訳で応じる。神父の説教は、人々を感動させはするが、それは建前に過ぎず、現実には苦しむ人々を救うのではなく、むしろ暴力への忍従を強いている。また彼は農場主たちの先住民への暴力にも、しつけであるとして称賛を与える。そして先住民に対する主人公の共感を汚らわしいものとして一蹴する⁷。

「ボスたち」に学校の外の世界への言及はないが、やはり二つの暴力が存在している。主人公たちの通う学校の校長は試験の時間割を非公表とし、それに対して主人公を初めとする生徒たちは抗議の集会を開く。しかし学校側は聞く耳を持たず、抗議の声を上げた生徒を教育上の措置に反抗したという理由で処罰する。この権威主義的な圧力に対抗するため、主人公たちは集団サボタージュを開始するのだが、処罰を恐れる生徒たちは消極的で、計画には綻びが見え始める。主人公ら「ボス」たちの一人が、言うことを聞かない下級生を殴りつけたことから運動は決定的に崩壊する。また「ボス」たちの内部でもリーダーの座を巡って殴り合いの争いが以前にあり、確執が残っていたことも失敗の遠因となっている。この短編では、校長という権威への抗議が、生徒たち内部の暴力によって自壊し、挫折していく様が描かれているのである。

『都会の犬ども』の舞台となるレオンシオ・プラド士官学校は、他の三作品にもまして激しい暴力と腐敗に満ちている。生徒たちは賭博、飲酒、カンニング、果ては試験問題を盗み出すという悪事を働いていて、また一番気弱な生徒リカルドは「奴隸」と呼ばれいじめを受けている。試験問題を盗んだ犯人を学校に密告したりカルドは、軍事教練の最中に

不審な死を遂げる。実はジャガーという生徒に後ろから撃たれたのだった⁸。ジャガーは学級の実質的なリーダーとして、弱肉強食の原理でもって他の生徒を統率していて、リカルドを最も苛烈にいじめていた。そして士官学校の当局でも、教官や兵士の間に腐敗が広がっており、生徒の中での不正に目を光らせることはしない。リカルドの不審死も、学校での不祥事を隠蔽するために事故死として処理される。リカルドと仲が良かった生徒アルベルトはジャガーの殺人を学校に訴えるが、校長でもある大佐はアルベルトの行っていた不正に話をすり替え、脅しによって訴えを取り下げざるを得ない状況に追い込む。また職務に忠実で厳格な教官ガンボア少尉は生徒の不正や不審死の問題を粘り強く追及するが、最終的に上司から疎まれ、左遷の憂き目にあう。この学校にあっては生徒も教育者も誠実な人間が苦しめられ、腐敗と暴力にまみれた人間が勝利するのである。また、弱肉強食の原理は、学校のみならず、窃盗を生業とする男イゲーラスに代表されるように、リマ市全体を支配している。抑圧的な制度への抵抗によって暴力が再生産されるという悪循環が現れており⁹、それは「ボスたち」にも共通した構造である。

バルガス＝リョサの『都会と犬ども』が学校の腐敗を軍隊の腐敗と重ね合わせて描いていることは明らかだろう。士官学校という場所は学校であると同時に軍隊という組織の一部でもある。この学校と軍隊の二重写しは、バジェホやアルゲダスの作品の内にも見られる。『パコ・ユンケ』の教師が生徒にかけける号令は「軍人の声で (con vos de militar)」行われる¹⁰し、その視線は「軍人のよう (como un militar)」である¹¹。『深い川』のリナーレス神父は愛国心と隣国チリへの敵愾心¹²に燃え、生徒たちに軍隊ごっこ遊びをさせる。以下の引用箇所に見られるように、学校という場は社会のミクロコスモスであると同時に、軍隊とも重ね合わせて描写されているのである。

Los sermones patrióticos del Padre Director se realizaban en la práctica; bandas de alumnos “peruanos” y “chilenos” luchábamos allí; nos arrojábamos frutos de la higuierilla con hondas de jebe, y después, nos lanzábamos al asalto, a pelear a golpes de puño y a empujones. Los “peruanos” debían ganar siempre. En ese bando se alistaban los preferidos de los campeones del Colegio, porque obedecíamos las órdenes que ellos daban y teníamos que aceptar la clasificación que ellos hacían.¹³

神父の愛国的な説教は実行に移され、そこでは「ペルー人」グループの生徒たちと「チリ人」グループの生徒たちが争った。ゴム製のぱちんこでトウゴマの実を撃ち合い、その後で飛び出して、こぶしで殴ったり体当たりをしたりした。「ペルー人」はいつでも勝つ側でなければいけなかった。こちらのグループには学校のチャンピオンたちが気に入っている生徒が入っていた。なぜなら、彼らの命令は絶対で、そのグループ分けは受け入れるしかなかったからだ。¹⁴

学校、社会、そして軍隊という三つの要素は、暴力と腐敗が横行しているという点において、共通しているのだった。軍隊がその内部に暴力を含むのは明らかだが、組織として腐敗し規律が無くなったとき、暴力はただ弱者をいたぶるものとして表面化し、それは学校、社会にも同様に見られる現象である。

小説が学校をそのようなものとして描いているならば、学校という場を批判的に描くことはそれ自体が社会への批判としての意味合いを帯びるだろう。そこには三人の作家がそれぞれに持った社会批判の目線を反映される。そして彼らに共通した思想的背景はマルクス主義である。

バジェホは 1918 年のリマのサン・マルコス大学文学部に入学して以来、ペルーにおけるマルクス主義者の筆頭で、後にペルー社会党の創設者となるホセ・カルロス・マリアテギと親交があった。マリアテギは土着主義と融合した特異なマルクス主義を持論とし、後代のインディヘニスモ運動の大きな流れを形成した。マリアテギは当初アヤ・デ・ラ・トーレ率いる APRA（アメリカ革命人民同盟）と協調するが、ソ連コミンテルンとの関係を巡って両者は決裂し、社会党を結党するに至る¹⁵。この時にバジェホはマリアテギを支持している。また 1920 年にペルー北部の都市トルヒージョで知的扇動者として投獄された経験も彼の活動に影響している。

アルゲダスもまたマリアテギの流れを汲む作家である。幼少期に実母が亡くなり、資産家の義母とその息子には疎まれたため先住民の召使たちと共に生活を送った。そこから、白人の両親のもとに生まれたにも関わらず先住民の世界に親近感を覚えたことが、後に彼がインディヘニスモ文学へと向かう要因となっているのである。1931 年にはバジェホと同じサン・マルコス大学文学部に入学し、マリアテギやレーニンの著作に触れた¹⁶。1937 年、スペイン内戦を巡る抗議の集会に参加したために投獄されている。

バルガス＝リョサも 1953 年に他二人と同様にサン・マルコス大学に入学し、法律と文学を学んだ。サルトルに傾倒した彼は在学中に共産党の地下活動に参加するなど、マルクス主義者としての顔を見せている。1959 年に起きたキューバ革命に対して彼は支持を表明している。ただし、彼は 1971 年に起きたキューバの言論弾圧事件であるパディージャ事件を機にキューバへの支持を撤回し、その後 1990 年の大統領選に立候補した時の主張では社会主義は影をひそめ、新自由主義的な政策を掲げている。とはいえ『都会と犬ども』が著されたのはラテンアメリカがキューバ革命に湧いていた 1962 年のことで、やはりマルクス主義あるいはサルトルの影響が強い時代だった。¹⁷

アルゲダスが作品のもととなるアバンカイの寄宿学校に入っていた 1924 年から 1925 年は、レギーア長期独裁政権の真ただ中だった。またバジェホが「パコ・ユンケ」を執筆した時期にはこの政権が 1930 年に軍部のクーデターによって倒された後に大統領に就任したサンチェス・セロが APRA に暗殺されるなど、社会情勢は混迷を極めていた。バルガ

ス＝リヨサが作品のモデルとなった士官学校の生徒だった時代もまたオドリア大統領による独裁政権がペルーの社会に影を落としていたのだ。彼らが学校という舞台を通して批判した社会は、まさに混沌と腐敗の中にあった。

家庭からの追放

子供が大人になり社会に参加するための通過儀礼として学校に通うとき、そこには家庭との断絶という現象が必ず伴っている。家庭を離れることによって、それまでの保護された状態は一変し、無防備な状態に身を置くことになる。家庭の中で保護されてきた少年はそこから無理矢理引きはがされ、暴力が横行する現実社会＝学校の中に否応なしに放り込まれる。そこで少年は「大人」になるための歩みを始めるのだが、「大人」になることは暴力と偽善に自らの身を浸すことでもあるのだ。家庭と学校＝社会は対照的なものとして描かれている。

パコ・ユンケが町の学校に初めて足を踏み入れると、母親は彼を置いて帰ってゆく。彼は故郷では見たこともないような多くの生徒が騒がしく遊び回っているのを見て、不安を覚える。その不安は、他の生徒の多くがパコの家庭とはかけ離れた富裕層の子弟であり、先住民系で貧しい彼が孤立した立場にあることから増幅される。ウンベルトの空想的な発言は、あるべき場所から引きはがされたパコの孤独を際立たせている。ウンベルトの空想では、彼の家の中では水から出した魚が死ぬことはなく、生き活きとしている。そしてその理由は、父親が金持ちであるから、である。水の中から出された魚は社会階層の下部に位置する人々を象徴していると同時に、家庭から離された少年の心理を暗示しているのだ。

バジェホ自身にとっても家庭は重要な位置を占めていたことが窺える。両祖父がカトリックの司祭、父が地方官吏であった家に生まれた彼は、厳格なキリスト教の雰囲気の中で育った。彼は家族の原型を「聖家族」のうちに見ているのだ。詩集『黒き使者』に収められた「兄ミゲルに捧ぐ」では「聖家族」の欠損である兄の死への痛切な悲しみが表されている。『トゥリルセ』においても家族、とりわけ二度と戻ることのできない過去の存在としての家族をテーマとした作品が見られる¹⁸。家庭を離れ学校の暴力にさらされたパコの苦難は、作者自身の別離の苦しみと重なり合っている。

『深い川』は十一章のうち初めの三章を父との旅と別れにあてている。父親は継母と義兄弟に憎まれる生活から主人公の少年エルネストを救い出す。彼は貧しい弁護士で、友人の訴訟を援助することになり、息子をアバンカイの寄宿学校に置いてゆく。主人公が父親の庇護を離れ、一人で問題に立ち向かわなければならなくなった所から物語は大きく動き

出す。そして学校の内外で横行する暴力に悩みを抱いたときには、魔力を帯びた独楽スンバイユを通して父へ言葉を届けようと試みるのである。

エルネストという登場人物にはアルゲダスの自伝的要素が強く反映している。先述のように実母が幼少期に死亡し、継母から疎まれたために先住民の中で生活したこと、父親との旅の末にアバンカイの寄宿学校に入るに至ったことはそのまま符合している。父親はアルゲダスがサン・マルコス大学に入学した翌年の1932年に死去している。『深い川』は亡き父親の姿を追憶する物語でもあるのだ。

バルガス=リョサの父親は彼が生まれて間もなく姿を消してしまった。そのため彼は母方の祖父母の家庭で育ち、父親は既に死去したのだと聞かされていた。家族の愛に包まれ、自身が「黄金時代(*una edad de oro*)」¹⁹と呼ぶ少年期に、彼は物語を書く楽しみを覚え、将来の作家としての素地を作ったのだ。しかし、その後父母は和解し、生まれて以来顔も見つけない父親との再会によって「黄金時代」は終わりを迎える。リマでの三人暮らしは軋轢が絶えず、軍人氣質の父親は息子の文学愛好を毛嫌いした。そして息子を士官学校へ強制的に入学させる。そこでの苦難が後に同名の学校を舞台とした小説『都会と犬ども』を執筆する動機となったことはよく知られている。バルガス=リョサにとって愛すべき家庭は母系であり、父親、そして父権的な存在は、彼を家庭から引き離す障害として存在しているのである。

父親の強制によって士官学校への入学を決めるという要素は『都会と犬ども』のアルベルトと「奴隷」リカルドにも現れている。リカルドがジャガーに撃たれ死亡するに至っても、父親は気弱な彼を士官学校に入れたことは精神を鍛えなおすために必要なことであったのだと主張する。また「ボスたち」においても主人公の生徒と父親との確執を匂わせる描写が存在している。

レオンシオ・プラド士官学校に入学した生徒たちが受ける通過儀礼は陰惨なものである。上級生の暴行と侮辱を受ける中で子供たちは人間としての尊厳を奪われ、「犬っころ」として扱われる。彼らは暴力の中で生き延びるために自らも暴力に染まるか、そうでなければアルベルトのように「奴隷」の地位に落ちる他はない。

以上に見てきたように、家庭という楽園から追放された少年たちは、そこからはかけ離れた、学校という暴力と腐敗に満ちた空間に押し込められる。学校は家庭と社会の媒介となり、子供を社会に適応させて「大人」を作り出す。しかしそこで適応できない者は虐げられ、適応した者は偽善的な大人に作り替えられてしまうのである。

暴力からの救済

それでは、暴力の場へと引きずり込まれた少年たちは為す術もなく暴力と不正に染まってしまうのかといえば、必ずしもそうではない。それぞれの作品は暴力からの救済も内包しているのである。

この救済の手段の一つとして、まず登場人物同士の和解を挙げることができる。和解によって暴力の根源となっている対立は解消することになる。『深い川』のエルネストはふとしたきっかけでロンディネルという生徒と決闘をすることになる。多くの生徒が嘸し立てるので引っ込みがつかなくなってしまうが、他の生徒の仲介で、ロンディネルが決闘を恐れていることを知り、仲直りを申し出る。この場面では人間の暴力性を掻き立てる学校の雰囲気打ち勝つという形で和解が成立しているのである。また、この作品において間接的な暴力の象徴ともいえるリナーレス神父も、エルネストとささやかな和解を遂げることになる。

「ボスたち」や『都会と犬ども』においても和解は重要な要素となっている。「ボスたち」の主人公たちが主導する抗議運動は挫折に終わるが、一方で主人公ともう一人の「ボス」の生徒ルウは、リーダー争い以来の対立を解消し、和解するに至るのである。『都会と犬ども』では、リカルドとの友情のためにジャガーを告発したアルベルトの姿勢を、ジャガーは認める。アルベルトの方でもジャガーのことを認め、両者の間に和解が成立する。

もう一つの救済の方向として、不正と暴力に対する闘争という道も存在する。「パコ・ユンケ」の主人公はウンベルトの暴力を受けても抵抗を見せず涙を流すばかりで、一見するとそこには救いなど無いかのよう思える。しかし、もう一人の生徒パコ・ファリーニャの子供じみているが好戦的でウンベルトを恐れない態度は、和解とは正反対の闘争による問題解決を指し示している。彼がパコ・ユンケと同じ名前を持っていることは、対極的な性格を持ちながらもパコ・ユンケの分身的な存在であることを暗示しているともできよう。パコ・ユンケの質問に対してパコ・ファリーニャは答える。

-¿A ti también te pega el niño Humberto?

-¿A mí? ¡Qué me va a pagar a mí! Le pago un puñetazo en el hocico y le echo sangre. ¡Vas a ver! ¡Como me haga alguna cosa! ¡Déjalo y verás! ¡Y se lo diré a mi mamá! ¡Y vendrá mi papá y le pegará a Grieve y a su papá también, y a todos!²⁰

「ウンベルトくんはきみのことも殴るの？」

「おれを？ やれるもんならやってみろ！ 鼻に一発くれて、血を流させてやるさ！ 見てなよ！ おれをどうにかできるもんか！ だまって見てるんだ！ それに母さんに言いつけて

やる！ しかも父さんがやって来て、あのグリエベも、やつの父さんも、誰だって殴ってくれるんだ！」

『深い川』のエルネストも他の生徒や神父と和解する一方で、最も暴力的な生徒ジェーラスや、エルネストの叔父にあたる横暴な農場主に対する憎悪は初めから変わることなく抱き続けている。小説の最後に置かれた一連の文章はこの二者への怒りの叫びで占められている。

Empecé a subir la cuesta. Recordé entonces la advertencia del Padre Director y los relatos de Antero.

-¡El Viejo! –dije-. ¡El Viejo!

Cómo rezaba frente al altar del Señor de los Temblores, en el Cusco. Y cómo me miró, en su sala de recibo, con sus ojos acerados. El pongo que permanecía de pie, afuera, en el corredor, podía ser aniquilado si el Viejo daba una orden. Retrocedí.

[...] El río la llevaría a la Gran Selva, país de los muertos. ¡Como al Lleras!²¹

ぼくは坂を上り始めた。やがて神父の忠告とアンテロの話思い出した。

「あのじい！」ぼくは言った。「あの老いぼれめ！」

クスコでテンプローレスのイエスの祭壇の前で祈っていたあの男。応接室である金属のような目でぼくを見た男。あの、外の廊下ですっと立っていた召使いは、じいさんが命令を下すだけで消されてしまうのだ。ぼくは引き返した。

[...] 川の流れは密林の、死者たちの国に「疫病を」運んでいくことだろう。あのジェーラスを押し流したように！

これらの小説に見られる闘争という形での救済は問題を孕んでもいる。まず闘争が成功する可能性がほとんどないということである。パコ・ユンケが仮に勇気を出してウンベルトに歯向かったとしても、結局のところ親同士の力関係の前に敗れるだけだろう。社会的弱者が強者に対して反抗するも、あえなく抑え込まれるという展開は、インディヘニスモ文学に繰り返し見られる特徴といえる。そのうえ、もしウンベルトを負かしたとしても、学校内における暴力の問題を根本的に解決することにはならないのである。

『都会と犬ども』では、また別の傾向を見て取ることができる。それは、家庭への回帰ともいうべきものである。先述したように家庭は学校とは対照的な空間であり、学校に身を置くということは家庭からの回復しがたい別離を伴っているが、バルガス＝リョサは学校という空間から再び離れた所に家庭の回復を試みているのである。アルベルトは最終的

に士官学校を卒業した後には、士官学校に入る前のような家庭生活に戻り、父親との関係も改善する。厳格な教官ガンボア少尉は地方に左遷されてしまうが、まさにその時に第一子が誕生したとの連絡が届く。彼は仕事上の立場としては挫折するが、同時に家庭においては希望を与えられているのである。学級の暴君ジャガーもまた士官学校を卒業してからはまっとうな生活を始め、幼少期からの憧れの存在だった女性テレサと結婚し、新たな家庭を築くことになる。彼ら三人の登場人物はいずれも、士官学校という暴力渦巻く場から卒業あるいは転属という形で離脱すると同時に、家庭の中に救済を見出すのである。

ただし、バルガス=リヨサにとって家族の中でも父親との関係は厄介なものである。アルベルトが父親と関係を改善する一方で、アルベルトと同様に作者の分身としての性質を備えた「奴隷」リカルドは命を落とし、父親は息子を失ってしまう。対照的な結末を迎えた二組の親子には、作者の父親への反発も見え隠れしている。父子の間にある葛藤というテーマは1969年の小説『ラ・カテドラルでの会話 (Conversación en la Catedral)』に引き継がれることになる。彼にとって回帰すべき「家庭」とは、父よりもむしろ母方の祖父母と共に過ごした時代にあった。

暴力の場からの離脱と家庭への回帰を通して救済、暴力の排除を見出すバルガス=リヨサの作品のあり方は、バジェホとアルゲダスが示したような闘争という戦闘的なあり方とは正反対のものであるといえよう。これは、彼がアルゲダスを含むインディヘニスマ文学を批判的に取り入れた結果とも考えられる。生徒たちの反抗は成功しない上、それ自体が暴力へと変質するものとして描かれている。彼らは闘争の失敗を経験して、その後に救済を見出すのである。

また、このような隔たりは、『都会と犬ども』執筆以降の彼の思想の変遷を考慮すれば必ずしも不思議ではない。マルクス主義の思想を生涯持ち続けたバジェホやアルゲダスと異なり、バルガス=リヨサは先述したように1971年のパディージャ事件を契機としてマルクス主義を放棄し、革命思想を批判するようになるのである。『都会と犬ども』執筆時の彼は大筋としてはマルクス主義の考えを重視していたことは確かであるが、後に自由主義者へと転向する素地は存在していたのである。それを「新しい小説」の担い手としてバルガス=リヨサが持っていた「新しさ」の表れと見ることもできるだろう。

結論

以上、バジェホ、アルゲダス、バルガス=リヨサの三人の作家が描く学校という舞台について考察した。第一に、学校は暴力と腐敗に満ちた場として描かれ、その点において社会の、そして軍隊のマイクロコスモスとしての側面を持つものであった。それぞれの作家は

学校を批判的に描写することを通して間接的に当時のペルー社会に対する社会批判を展開するのである。そして学校と対照的な場としての家庭も作品の重要な要素となっていた。小説における主人公の少年は、暴力から庇護してくれる家庭からの追放を経て、学校に入り、暴力の世界に晒されながら「大人」への道を歩み始めるのである。また登場人物はただ暴力に流されるのではなく、そこからの救済も見てとることができる。救済には和解、闘争、家庭への回帰という三つの方向性がある。バジェホやアルゲダスはこの中でも闘争を通して暴力に打ち勝とうとする傾向にあったのに対して、「新しい小説」の書き手であるバルガス=リョサは家庭への回帰を通して暴力を排除しようとする傾向を持っていた。救済のあり方において作家ごとの違いはあるものの、学校という場所は、批判の対象となる社会の暴力とそこからの救済を包括的に描くために有用な舞台設定だったといえるだろう。

注

¹ 山本(1984), pp. 13-16.

² バジェホの基本的な経歴については Vallejo(2007a)を参照のこと。

³ Foster(1992), p. 523.

⁴ アルゲダスの基本的な経歴については Arguedas(1983b)を参照のこと。

⁵ Oviedo(2001), p. 329.

⁶ 彼の名字ユンケ (Yunque) は先住民に多く見られ、かつ使用人として資産家の家で働いているという立場から考えて、パコ・ユンケと母親は先住民であると考えられる。

⁷ フランコ(1974), p. 276.

⁸ ジャガーが本当にリカルドを撃ち殺したのかどうか、物語中ではっきりとは示されない。ただし1965年にアレキパで開催された作家会議においてバルガス=リョサは、ジャガーによる殺人があったことは自明だと考えていたと述べている。(Primer encuentro... p. 86.)

⁹ ジョゼ(1975), p. 130.

¹⁰ Vallejo(2007b), p. 326.

¹¹ Vallejo(2007b), p. 338.

¹² 1879年から1884年にかけて繰り広げられた太平洋戦争において、ペルー・ボリビア連合軍はチリ軍に敗北を喫している。

¹³ Arguedas(1983a), p. 47.

¹⁴ 拙訳。以下引用文の翻訳はすべて拙訳だが、参考文献に挙げた邦訳書は参考にしてている。

¹⁵ 野谷(1978), p. 27.

¹⁶ Shaw(1981), pp. 65-66.

¹⁷ 立林(2008), pp. 24-25.

¹⁸ 野谷(1977)

¹⁹ Vargas Llosa(2004c), p. 14.

²⁰ Vallejo(2007b), p. 334.

²¹ Arguedas(1983a), pp. 202-203.

参考文献

- Arguedas, José María. “Los ríos profundos.” *Obras completas, Tomo III*. Lima: Editorial Horizonte, 1983a. 9–213.
- Arguedas, José María, and Sybila Arredondo Arguedas. “Vida y obra de José María Arguedas y hechos fundamentales del Perú.” *Obras completas, Tomo I*. Lima: Editorial Horizonte, 1983b. XV–XXVI.
- Foster, David William. *Handbook of Latin American Literature*. New York: Garland Pub., 1992.
- Oviedo, José Miguel. *Historia De La Literatura Hispanoamericana 4. De Borges Al Presente*. Madrid: Alianza, 2001.
- Shaw, Donald Leslie. *Nueva Narrativa Hispanoamericana*. Madrid: Catédra, 1981.
- Vallejo, César. “Cuadro cronológico.” *Narrativa completa*. Madrid: Ediciones AKAL, 2007a. 99–113..
- . “Paco Yunque.” *Narrativa Completa*. Madrid: Ediciones AKAL, 2007b. 323–340.
- Vargas Llosa, Mario. “La ciudad y los perros.” *Obras completas I - Narraciones y novelas 1959-1967*. Barcelona: Galaxia Gutenberg / Círculo de Lectores, 2004a. 125–508.
- . “Los jefes.” *Obras completas I - Narraciones y novelas 1959-1967*. Barcelona: Galaxia Gutenberg / Círculo de Lectores, 2004b. 27–49.
- . “Prólogo.” *Obras completas I - Narraciones y novelas 1959-1967*. Barcelona: Galaxia Gutenberg / Círculo de Lectores, 2004c. 9–23.
- Primer encuentro de narradores peruanos, Arequipa, 1965*. Casa de la Cultura del Perú, 1969.
- アルゲダス, ホセ・マリア、杉山晃訳『深い川』現代企画室, 1993.
- ジョゼ, ジャック、高見英一・鼓直訳『ラテンアメリカ文学史』白水社, 1975.
- 立林良一「マルクス主義から新自由主義へ——マリオ・バルガス=リヨサの軌跡」『立命館経営学』46(5)(2008): 23-34.
- 野谷文昭「『黒き使者』及び『トゥリルセ』における家・家族のテーマとその意味」『HISPÁNICA』21(1977): 101-114.
- 「一九二〇年代におけるアプラと国際関係——主にアヤ・デ・ラ・トーレの活動を中心に——」『国際政治』59(1978): 19-39.
- 「インディヘニスモの抵抗」『ラテンにキスせよ——「南」のリズムを読む』自由国民社, 1994. 240-244.
- バルガス=リヨサ, マリオ、杉山晃訳『都会と犬ども』新潮社, 1987.
- バルガス=リヨサ, マリオ、野谷文昭訳「ボスたち」『小犬たち/ボスたち』国書刊行会, 1978. 64-96.
- フランコ, ジーン、吉田秀太郎訳『ラテン・アメリカ文化と文学: 苦悩する知識人』新世界社, 1974.
- 細谷広美(編著)『ペルーを知るための62章』明石書店, 2004.
- 吉田秀太郎「セサル・バジェーホとその時代」『Estudios hispánicos』12(1986): 17-31.

Entre la violencia y la salvación

Enfocado en las narrativas escolares del Perú

MIYASHITA Kazuhiro

Es indudable que César Vallejo, José María Arguedas y Mario Vargas Llosa son escritores que representan la literatura peruana en el siglo XX. Cada uno de estos tres autores escribió una o dos historias ambientadas en escuelas, es decir, *Paco Yunque* de Vallejo, *Los ríos profundos* de Arguedas, y “Los jefes” y *La ciudad y los perros* de Vargas Llosa. Este artículo analiza la función de las escuelas que aparecen en sus obras.

La escuela se describe como un sitio lleno de violencia y corrupción, y al mismo tiempo como un microcosmo de la sociedad y el ejército de entonces. Los autores criticaron a la sociedad y al ejército a través de una descripción crítica de escuela. El marxismo tenía una gran influencia sobre ellos. La familia tiene una naturaleza opuesta a la escuela, la sociedad, o el ejército, y defiende al niño contra la violencia, pero desde que este empieza a ir a la escuela, él debe alejarse de su familia y echarse al mundo violento. Tres tipos de salvación se muestran en estas obras: la reconciliación, la lucha, y el retorno a la familia. La primera corresponde a las obras de Arguedas y Vargas Llosa. La segunda a Vallejo y Arguedas. La tercera solo aparece en la novela de Vargas Llosa. La escuela funciona como un sitio útil para expresar una crítica a la violencia y una salvación ante ella.